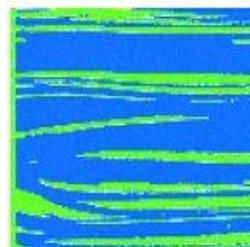


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2016年 秋号 No.84 (2016年10月21日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX : 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL : <http://www.j-aba.jp/>
E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第34回年次大会を開催して.....佐伯 大輔
2016APPBS「ペアレント・トレーニング」ワークショップ実施報告.....三田地 真実・岡村 章司・神山 努
連載：行動分析学の道にはいった理由 (4)「なすがままに～自閉症と応用行動分析～」.....井澤 信三
連載：いま、こんな研究しています (18)「言語聴覚療法への適用と発展に向けて」.....大口 明子
イタリア・パドバ大学滞在記.....眞邊 一近
2017年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」.....渉外委員会
J-ABA ニューズ 83 号の訂正とお詫び・編集後記.....ニューズレター編集部

日本行動分析学会第34回年次大会を開催して

第34回年次大会準備委員長 佐伯大輔 (大阪市立大学)

第 34 回年次大会は、2016 年 9 月 9 日 (金)～11 日 (日) に、大阪市立大学杉本キャンパスにて開催されました。大会開催のご依頼を頂いた時は、「これは大変なことになった」と思いました。これまで、他の方が担当した大会の手伝いをしたことはありましたが、いずれも大変だった記憶があることと、私自身が大会準備委員長を経験したことがなく、どうすればよいか全くわからなかったからです。私の研究室は学生が少なく、人手不足の問題もありましたので (お引き受けした時点では大学院生以上が 2 名でした・・・)、「お断りしないと」と思っていたのですが、行動分析学会には、学部生の頃から育てて頂いた恩を強く感じていましたし、また、大阪では年次大会をまだ開催したことがな

い、ということもあり、お引き受けすることにしました。

準備段階では、振替用紙で入金できない普通の預金口座を作ってしまったたり、冷房のない体育館でポスターセッションをしようとしたりなど、多くの失敗がありましたが、何とか進めていくことができました。それはひとえに、大会支援委員の奥田健次先生、吉野俊彦先生、前大会支援委員の中島定彦先生、前年度の大会準備委員長の竹内康二先生、事務局の川原さんのおかげです。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。また、「大阪市大関係者」ということで、伊藤正人先生、山口哲生先生、空間美智子先生からも、半ば強引にお願いして力を貸して頂き、大変助かりました。

大会プログラム作成時には、発表申込が少なかつたらどうしようかと心配しておりましたが、それも杞憂であり、自主企画シンポジウム 5 件、公募企画シンポジウム 4 件、ポスター発表 90 件と、多くの方々から発表のお申込みがありました。大会参加人数も 400 名を超え、多くの方々にご参加頂きましたことに、心より感謝致しております。

大会当日のことは、実はあまり記憶がなく、断片的にしか覚えていないのですが、何人かの先生方から、「内容がバラエティに富んでいて良い」というお褒めの言葉を頂きました。これは大会準備委員会の力ではなく、やはりご参加頂いた方々のおかげです。シンポジウムのキーワードだけ抜き出しても、心の哲学、防災、医療、オペラント研究史、強度行動障害、動物園、ACT、運動学習、連合学習、心理臨床、人工知

能、認知症と、本当に様々な話題が展開されました。残念なことに、私自身は大会本部にすることが多く、これらのシンポジウムやポスター発表にはほとんど顔を出すことができなかったのですが、大会運営を通して、同じ学会にいながら普段は余りお話しすることのない先生方とお知り合いになれたのは、良い経験でした。大会当日は、手伝ってくれた学生のみなさんにも大いに助けられました。

振り返ってみますと、大変だろうと思っていたことが楽しかったり、自分で色々しないといけないと思っていた部分で多くの人に助けて頂いたり、良い意味での意外性を多く感じました。このような、素晴らしい経験ができたのも、学会の先生方や今回の大会に関わって下さった方々のおかげです。ありがとうございました。

2016APPBS 「ペアレント・トレーニング」ワーク ショップ実施報告

三田地真実（星槎大学大学院教育学研究科）・岡村章司（兵庫教育大学大学院特別
支援教育専攻）・神山努（国立特別支援教育総合研究所）

2016年6月24日～26日、台湾の国立台湾師範大学において初の Asia Pacific International Conference on Positive Behavior Support (2016 APPBS) が開催されました。大会二日目に、私達三人が企画した、ペアレント・トレーニングをテーマ (How to Make Your Parent Training Successful: Building Good Relationships Among) とした ワークショップを開催しました。このプログラムは表に示した通り、まず本ワークショップの趣旨および目的について説明し、次に日本におけるペアレント・トレーニングの事例紹介を行いました。その後、参加者は5名程度のグループに分かれて、ペアレント・トレーニング「あるある困った事例」にどう対応するかについて検討してもらいました。取り上げた事例は、①子どもに対する標的行動を選定する時に、考えがまとめられないで困惑している保護者の例、②子育ての工夫について話し合おうという時に、ネガティブな意見ばかり発言する保護者の例の二つでした。このような保護者にどのように対応していくかについて、まずはグループでロールプレイを行ってもらい、最後に、全員の前で2グループが実際にロールプレイの実演をもらい、それを踏まえて参加者からの質問、及びディスカッションの時間を持ちました。

当日、私たちのワークショップの裏番組として大講義室での講演会もあり、実際に何人集まってくれるか開始前はハラハラしていましたが、モデレーターの Cheng-Fen Chang 氏のご尽力も

ワークショップの内容
・趣旨、目的の説明
・ペアレント・トレーニング事例紹介
・各グループでのロールプレイ
・ロールプレイ発表
・ディスカッション

あり、最終的には約 50 名の方が参加してください、ディスカッションは時間が足りないほどでした。国際学会だけあって、台湾、日本、香港などアジア諸国からの参加者のみならず、Family PBIS 研究の第一人者である Joseph Lucyshyn 氏（ブリティッシュコロンビア大学）も足を運んでくれ、有意義なコメントを下さり、会場は大いに刺激を受けました。参加者の背景も、研究者、学校教員、心理など様々でした。



わが国の学会ではあまり馴染みのないワークショップであったこと、APPBS は本会が第 1 回

だったこともあり、ワークショップが一体どのように展開していくのか全く想像できない中で数か月前から準備を進めてきました。しかしながら、参加者アンケートからも大変好評価が得られ、また、実際にワークショップを実施した私達も「楽しかった!」「またやりたい!」という気持ちで終わったことで一安心しています。

今後、さらに私たち自身が保護者支援に関する研究を進めると共に、研究成果の普及につながる今回のようなワークショップの企画・実施方法についても、併せて深めていきたいと思えます。

<連載：行動分析学の道にはいった理由（4）>

なすがままに～自閉症と応用行動分析～

井澤信三（兵庫教育大学）

ちょっと余談も含めて、回想的に書かせていただきます。

私は、東京学芸大学教育学部に入学しました。「東京」という選択には、私は出身が山形県なのですが、単純に、東京に行きたかったことがあります。もう一つの「教育学部」という選択には、父親が中学校の体育の教員であったことが影響したと思っています。家ではさほどでもない父親を慕って教え子の中学生が我が家に来ることは、子どもながら父親の人柄を感じるものでした。さらにもう一つ「心理学」を選択したのは、ヒトへの興味として「正常と異常」といったワードに惹かれていたことも覚えています。「自閉症」への関心にもつながっていきます。

大学に入ってからは、いろんな本やいろんな人との出会いから、いろんな刺激を受けました。特に、大学のサークル、精神病院でのバイト、居酒屋でのバイト、草野球チームとかでの人との出会い。また、友人・知人・たまたま出会った人と酒を飲んだりとか。そんなに真面目ではありませんで、その時その時で、まあまあ楽しい時間が過ぎていくといったような生活だったと思います。

そんな生活を変えてくれた、最大の恩人は、氏森英亜先生（当時、東京学芸大学教授。現在、有明教育芸術短期大学学長）です。学部3年生の後期から希望するゼミに所属するのですが、研究室を訪問し内諾を得ないといけない決まりだったように記憶しています。実は最初に氏森先生の研究室の隣の先生の研究室を訪問しました。ところが、私が読んだその隣の先生の本の

話をしたところ、「君は隣だな」と言われ、そのまま隣の氏森先生の研究室のドアをノックしました。そうしたら、氏森先生に「将来は何をしたいの？」ということ聞かれ、「あまり考えていません」と答えたところ、「大学院に行ったら」と言われ、「はあ、考えてみます」といったようなやりとりで、氏森先生にお世話になることとなりました。という何とも考えずに氏森研究室に決まったようですが、そうではなく、自分なりに「自閉症臨床」をやりたいという気持ちは強くありました。

氏森研究室では、毎週土曜日、いくつかのグループになって、そのグループ毎に自閉症等の障害のある子への臨床活動を行っていました。基本、個別セッションと小集団セッションで構成されていました。私は、比較的年齢の高い中学生、高校生の自閉症臨床グループに所属しました。氏森研究室は、学部、特別専攻科、修士、OB などなど、なんせ人がうじゃうじゃいて、年齢や学年が不明なヒト、研究室に住み着いているようなヒトもいて、まさしくインクルーシブでした。そんな中で、修士課程の先輩と大学院を修了したOBの方々がいろいろ指導してくれました。特に、月1回、OB会というのがあり、そこでは、大学院生の発表、OBの方々の発表、それで質疑応答があり、ちょっとこわい雰囲気の中で、厳しい指導もあったのですが、それでも楽しいと思えました。

氏森先生から最初に与えられた課題は、Autism (In G. Dawson (Ed.), Autism: Nature, diagnosis and treatment New York: Guilford Press.) といった分厚い本を読んでみなさい、

ということでした。その中の Lord, C & Magill, J. (1989). *Methodological and theoretical issues in studying peer-directed behavior and autism*. というタイトルの章を最初に読みました。それは、行動分析学の中身ではありませんでしたが、私の研究を「自閉症児の仲間との相互交渉」に方向づけてくれたインパクトのある内容でした。次に、Koegel, R. L., & Johnson, J. (1989). *Motivating language use in autistic children*. を読みました。当時（ちょっと前？）、ディスクリートからフリーオペラントといった流れがあり、自然環境下での言語指導の必要性が示唆されていました。なお、その後、この本は日本語に訳されています（1994年、日本文化科学社、東京学芸大学におられた野村東助先生らが監訳）。

行動分析学の学びは、ある意味、自学自習なところがありました。一つには、氏森先生の本棚にあった本を勝手に読んでいました（もちろん自分でも買って本を読みましたが）。一方で、大学院修士課程の時には、隼田征子先生の授業で、佐藤方哉先生の「行動理論への招待」と JABA の論文購読をしました。それと、研究室の仲間で勉強会もしました。博士課程に進学すると、氏森先生との 1対1 の授業があり、私の発表に対する厳しいコメントが待ち構えていました。私は、その頃、*establishing operation* や *setting event*、自閉症児のヒトへの *motivation* を高める操作に興味を持っていましたので、そのような論文をまとめて発表していましたが、その 3 つの用語 (*establishing operation*, *setting event*, *motivation*) について、厳しくその意味の吟味を求められました。また、清水直治先生の行動分析学関係の本の翻訳グループへ参加させていただき、年齢の近い仲間といっしょに学習させていただきました。今思い出しても、その時の学びは非常に有意義なものでした。

また、豊島区に安田生命社会事業団（現在、公益財団法人 明治安田こころの健康財団）の建

物があり、そこのライブラリーには、自閉症関係、行動分析関係の洋雑誌が一通り揃っており、何度か通った覚えがあります。そんな文献探しから見つけ出した「これだ！」という出会いの論文が以下のものです。

Gaylord-Ross, R., Haring, T.G., Breen, C., and Pitts-Conway, V. (1984) : *The training and generalization of social skill with autistic youth*. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 17, pp.229-247. 自閉症生徒 3 名と健常生徒との社会的相互作用を促進するために、3 つのレジャーアイテム（「ウォークマン」「パックマン」「チューイング・ガム」）を使用するスキルを課題分析し、それに基づいて自閉症生徒 3 名に行動連鎖化指導を行っている。その指導によって、その 3 名はレジャーアイテムを使用できるようになったが、健常生徒との社会的な相互作用は増加しなかった。この研究では、自閉症生徒 3 名と健常生徒を引きつける（刺激価の高い）レジャーアイテムを設置することやそのレジャーアイテムの使用法を自閉症生徒 3 名に教授することだけでは、両生徒間の社会的相互作用が促進されなかったという結果が示されており、レジャーアイテムの使用に関連する自閉症児の社会的行動の未熟さが指摘された。そこで、自閉症生徒に健常生徒への「接近」「あいさつ」「いっしょに遊ぶことを申し出る」「さよならのあいさつ」という一連の社会的な相互作用を開始、展開、終了させる社会的行動を指導すること、同時にその相互作用の相手となる健常生徒に対しても、自閉症生徒との「やりとり」を教授することの必要性を強調している。（引用：井澤信三・氏森英亜(1998)：青年期自閉症、発達障害者における社会的相互交渉スキル指導法に関する研究展望。学校教育学研究論集，創刊号，pp.113-122.）

博士論文では、自閉症児の相互交渉を促進するために、仲間同士による相互的な行動連鎖の獲得と、その後、行動連鎖中断法 (*behavior chain interruption strategy*) によって、仲間

相手への要求的なかかわりが生じやすくなることを応用しました。

何にしても、氏森研究室をノックしたおかげで、自閉症と行動分析学と密接に出会うことができました。それによって、自分に「軸」ができたというか、「自閉症と行動分析学をずっとやっていけばいいんじゃないか」という「芯」ができたと感じました。行動分析学を学んでいくと、もちろん難解なところもあるのですが、謎が解けていく感覚があり、「わくわくする体験」でした。それは、おもしろい小説を読んでいるのと似たような感覚がありました。また、2004年5月のBostonでのABAに、はじめて

参加しました。論文を読んだ研究者と出会えることは、これまた「わくわくする体験」でした。また、自分の論文が雑誌に掲載される、自分の論文が引用される、国内外の研究者から連絡がくること、そこからいっしょに研究できることも「わくわくする体験」です。

振り返ってみると、なぜ行動分析学の道に入った理由は明確ではありませんが、自分は「なすがまま」に行動分析学に導かれていったのだと思います。それは、「なるべくしてそうなった」ということで、それは今後もそうなんだろうと思っています。

<連載：いま、こんな研究しています（18）>

言語聴覚療法への適用と発展に向けて

大口明子（医療法人社団明日佳 札幌明日佳病院 リハビリテーションのための応用行動分析学研究会）

「具体的にどのようなお仕事ですか？」

職業が言語聴覚士と伝えた時、このような返答をされることは珍しくありません。そのため今では職業を尋ねられた際に始めから「病院でことばと食事のリハビリをしています」とざっくりばらんに伝えることも多くなりました。リハビリは広く知られてはいますが、言語聴覚士の存在はまだマイナーなようです。そんな言語聴覚士という職業ですが、主に医療施設、次いで保健・福祉・教育の場に所属されている方が多いようです。その中でも、小児言語・認知発達療育の場では ABA を用いた支援が知れ渡っている印象ですが、摂食嚥下、成人言語・認知、発声発語領域では、ABA の考えが浸透しているとは言えない現状にあると思います。

幸運にも私は、応用行動分析学の技法を積極的に導入している当院のリハビリテーション科で釣洋介先生をはじめとする理学療法士の先輩・同僚の方々に恵まれ、遠藤晃祥先生が会長を務めるリハビリテーションのための応用行動分析学研究会（Reha-ABA 研究会）にも参加させていただき、その理論に出会えました。具体的かつ測定可能な目標行動の設定、目標行動を要素に分ける課題分析、行動を取り巻く環境の評価・介入、これらは応用行動分析学で当たり前の理論と思われそうですが、正にそのままの考え方が、リハビリテーションの臨床の場にも当てはめることが出来ます。

療養型病院に勤務している私が臨床で出会う患者様は、発症から数か月ないし数年経過した失語症・構音障害、嚥下障害を呈している方た

ちです。ご高齢で認知症を発症している方も少なくありません。急性期・回復期を経て、あるいはご高齢による廃用症候群、認知症とともに徐々に進行されたこれらの障害を抱える患者様は、いわゆる「絶対に良くなりたい！意欲満々ががんばる！」という方が、もちろんいないわけではないのですが、多くはないのが慢性期リハビリの現実です。そのため、入職当初は、学生時代に想像していたリハビリとのギャップに戸惑いの連続でした。言語理解が困難で指示が通じない、記憶障害により学習できない、主訴がないし意欲もない。そんな臨床が繰り返される内、治らないのは認知症だから、高齢だから、やる気が無いから、なんて言い訳をしてしまったのも恥ずかしながら事実です。成果の出ない治療は私も患者様も弱体化されてしまいました。そんな一筋縄ではいかない方たちの治療だからこそ、行動の原因を個人におかず、客観的に個人と環境の相互作用と捉える応用行動分析学の理論は有用性が高く、強く惹かれるものがあったと考えられます。理論に触れてからは患者様の訴えのひとつひとつを取りこぼさず、どんなことが出来るようになればもっと良い生活を送ることが出来るだろうと思考を張り巡らせ、目標設定に臨んでいます。さらに具体的な目標を患者様と共有し、課題分析によりスモール・ステップが可能となることでゴールの達成感を感じていただき、環境評価から先行刺激・後続刺激を整備することで、目標動作の生起頻度を高めていく。ここまで達成できれば、「意欲満々ががんばる！」とばかりに積極的にリハビリを行っ

てくれていると評価することもできるでしょう。これが応用行動分析学の力であり、その理論がリハビリテーションでいかに大切なことかを強く感じながら日々の治療に従事しています。

治療において、効果の検証は必要不可欠です。自分の評価は正しいか否か、より早く、より良く改善する方法は無いか。常に問いかけながら、仮説の立案、変数の設定、条件の統制と進めていくと、臨床研究としてなんとか形になり、発表させていただく機会も得ることができました。早食いの習慣のため食形態が制限されていた認知症高齢者の方に食行動の改善を試みた介入では、問題点を咀嚼回数の少なさと評価し、咀嚼動作を引き出すための先行・後続刺激の統制を行いました(2015)。そのため、ベースラインから介入期・効果判定まで、昼食場面をのぞきこみ、下顎の動きを凝視しながら咀嚼回数を測定するという毎日を送っていました。手探りの研究でしたが、介入直後に咀嚼回数がグンと増加したとき、摂食速度が改善され食形態が向上したとき、対象者の方から「あなたのおかげです、ありがとうございます」と声をかけていただいたとき、私の脳内では多量のドーパミンが放出されたことと想像されます。なんとといっても、行動分析学を夢中で学び続けているのが、その確たる証拠です。

言語・発声発語領域では、重度の失語症と口腔顔面失行を併発している症例にあいさつ語の獲得を目指しました(2016)。音の構えに必要な呼吸と舌の動きを引き出すために、失語症の

方にも理解が得られる先行刺激の評価からはじめ、目標動作を引き出した際には、強化に繋がる後続刺激を提示しました。結果、動作の継続・獲得と繋がったとき、応用行動分析学の理論の有用性を再確認しました。

このように日々の臨床の中で、応用行動分析学を用いた治療を実践しています。今後も研究として形になった時には、臨床に携わる方たちと意見交換を行うとともに、理論の普及に努めたいと考えています。

めまぐるしく変動する社会の中、さしせまった団塊の世代が後期高齢者を迎える2025年を、「2025年問題」としてニュースで聞かれる機会も多いと思います。高齢者の増加は、障害を持つ方、リハビリテーションを必要とする方の増加に直結するでしょう。そこに立ち向かう医療のあるべき姿、リハビリテーションの目的を私が語るのは恐縮ですが、なんとといっても患者様を治すこと・より良い生活を送ってもらうことに他なりません。中でも、食べることの楽しみ、他者とのコミュニケーションは人間の生きがいであると信じています。その生きがいに寄り添い、一筋縄ではいかない対象者の行動を客観的に評価し、目標動作を引き出す。そんな応用行動分析学の理論が、言語聴覚療法で展開されていくと、私のかげがえのない「ことばと食事のリハビリ」というお仕事の可能性が、もっともっと広がっていくのではないかと期待しています。

イタリア・パドバ大学滞在記

眞邊 一近（日本大学大学院総合社会情報研究科）

現在、8月はじめから10月末までの短期のサバティカルで、イタリアのパドバ大学に滞在中です。パドバ大学は、歴史が古く、世界最古のボローニャ大学から自由を求めて飛び出した教員と学生達が作ったイタリアで2番目に古い大学として知られています。これまで教員を務めた有名な学者には、ガリレオをはじめ、ダンテ、学生にはコペルニクスや血液循環説を唱えたウィリアム・ハーバー等がいます。

また、世界で初めて1594年に作られた解剖学教室も有名で、ガイド付きのツアーで見て回ることが出来ます。当時、人体解剖は御法度なので、解剖台の裏にはブタがくりつけられていて、手入れがあったときにはひっくり返していかにもブタの解剖をやっているように見せかける仕掛けになっていたそうです。教室の中央に解剖台が置かれ、それを取り囲むように逆円錐状になった階段教室で、医学生達は手に各自ろうそくを持って、身を乗り出して見学していたため、酸欠で倒れる学生もいたようです。この見学ツアーでは、ガリレオが講義を行った木製の古びた教壇も見学できますが、写真撮影禁止で写真をお見せできないのが残念です。

パドバは、ミラノーベローナ（ロミオとジュリエットで有名）ーパドバーベネチアと、同緯度ラインにあります。ベネチアまでは列車で20分の距離です。イタリア訪問の前は、週末にベネチアに時々遊びに行くのを想定していた、この滞在記でもベネチアの写真を掲載する予定でしたが、土日も実験をやっている、残念ながらベネチアにはまだ行けていません。

ミラノマルペンサ空港に到着後、ミラノ駅のすぐ近くのホテルに一泊し、8/2のお昼にミラノ

中央駅を発ち、14:40過ぎにパドバに到着しました。日本の駅のターミナルは独立してそれぞれ階段を利用するタイプが多いですが、ミラノ中央駅はターミナルが横に繋がって同じフロアなので、すぐに目当てのターミナルに行くことが出来ます。ただ、自分が乗る列車がどのターミナルになるのかを示す電光掲示板を見ながら、手前で皆待っているのも、ものすごい混雑です。スリが多いというのも領けます。ミラノを出てからしばらくは、トウモロコシ畑が続いていました。あまりに延々と続くので、多分、家畜用のトウモロコシであろうと思われる。ベローナの手前あたりから突然広々としたのどかな葡萄畑に替わり、しばらく続いた後、パドバの手前から再度トウモロコシ畑に替わりました。さすがにワインの国だけあって、スーパーで買った1kgの葡萄は、日本円で168円でした。イタリアは時間が不正確だという印象があったのですが、ほぼ時間通りに到着しました。

パドバ大学のあるパドバの旧市街地は塀と川に囲まれていて、旧市街と外側をつなぐ道路には門と橋がセットになっています。その中のひとつに、ガリレオが木星の衛星を手製の望遠鏡で発見したと言われているモリーノ門（塔）があります。是非見てみたいと、パドバに着いた直後に地図を片手に出かけたのですが、それらしき塔が見当たりません。門の前に説明書きのある塔を発見して、その説明（英語の方）を読むと、その塔がどの様に作られ、有名であるかが書かれているだけで、ガリレオの名前は全く書かれていません。てっきり、この塔ではない



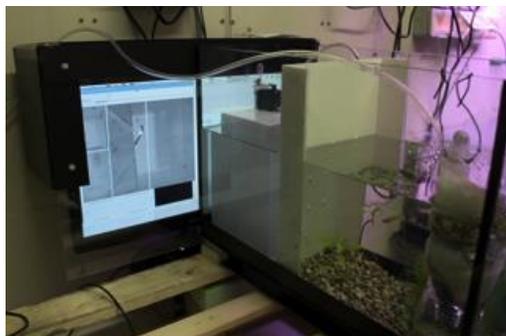
ガリレオが木星の衛星を発見したと言われているモリーノ門

と判断してさらに先に進んでもそれらしき塔はありません。再度、中心部に戻ってきて、地図を頼りにその塔を目指していくと、また、先ほどの塔に到着してしまいました。よくよく見ると、塔のアーチの内側にDA QUESTA TORRE GALILEO MOLTA VIA DE CIELIと書かれた石板が埋め込まれています。意味が分かりませんがGALILEOと書かれているので、これがその塔か！！と気がついた次第です。後で、電子辞書とインターネットで調べた結果、「この塔からガリレオは多くの天空の道を発見した。」という意味らしいです。滞在中の研究室のポスドクにも尋ねたところ、古いイタリア語で、今はこの様な言い方はしないとっていました。もっと立派な塔を想像していたので、この石板を発見するのに2時間半を要してしまいました。別の日に、ガリレオが住んでいた家があったところに行きましたが、普通の町並みに、ガリレオが住んだ家という案内標識があるだけでした。

今回訪問中の研究室は、グッピーを中心とした魚類や他の生物の数的弁別能力を主に研究しているところで、PlosOne等での論文があります。到着早々、カエルの実験を見せて貰いました。

被験体は、自宅の近くで捕まえてきたツリーフログ（草木にとまるカエル）で、実験装置は、大きな円筒形の底の中央に斜めにチューブが設置されていて、側面の壁には、緑の縦のストライプの本数が多い細いものと、少ない太いものが左右に配置されていました。底のチューブにカエルを入れ、チューブに下から水を注入すると、カエルが這い出してきた、目の前にある緑のストライプの方に向かって登っていきます。これまでの結果では、有意に本数の多い方に登ることが確認されていて、弁別刺激の明るさや面積を統制しているので、カエルが本数の違いを弁別している可能性が考えられという説明を受けました。本数の多い方に移動する理由として、本数が多い方が目立たなくなり、安全であるからだということです。カエルは、一匹一試行ずつ行い、終了すると、また元の場所に戻してあげるそうです。

数年前に、ブラジルで魚類の学習行動を研究しているパラ州立大学のアマウリ・ゴウヴェア教授にゼブラフィッシュ用スキナーボックスを提供したことがきっかけで、アマウリ・ゴウヴェア教授の知り合いだったこの研究室の教授であるアンジェロ・ピザッサ教授と知り合いになり、今回の訪問に繋がりました。アンジェロ・ピザッサ教授のところで研究方法は、ビデオ記録を除いて電子機器を一切使用しないすべて手動によるもので、弁別刺激や強化子の提示も人が提示するという動物を対象とする行動実験では出来るだけ避けるべきと考えられるシステムを使用しています。心理学科ではありますが、どちらかというと、心理学よりは生物学寄りで、魚の生態に適した実験環境を整えることを優先しているようです。半田ごでも置いておらず、到着早々購入してもらいました。唯一の電動工具は、穴開け加工に使用している充電式のハンディタイプのドリルで日本製（マキタ）です。マキタの電動工具は、アメリカのDIYの店でもよく見かけましたが、イタリアでもシェアがあるようです。



アンジェロ研究室の方式に合わせたビデオトラッキングを利用した小型魚類用スキナーボックス 飼育水槽と実験水槽が同居しています。

今回、私が日本から持ち込んだ装置は、制御装置とモニターすべてを含めて2万円台で作成可能なリアルタイムビデオトラッキングを利用した、小型魚類用スキナーボックスです。諸々の装置を持ち込むため、トランクの重さは30Kg弱にもなってしまいました。アンジェロ教授は、最初はこの装置に大変懐疑的で、ビデオトラッキングシステムは大変エラーが多いとか、モニターでの刺激は人工的すぎて、生物には自然に見えないのでe-ink モニターが良いとか色々「意見」を言っていました。今では、同じシステムを6セット設置することになりました。今後、賢馬ハンス効果に代表される古典的な実験者効果に関連する問題がこの領域から無くなる一助になればと期待しているところです。

私の所属している大学院は、インターネットを利用したコミュニケーションを教育の主たる手段としているので、日本とのインターネット接続は欠かせません。今回使用するのは、eduroamという大学等教育研究機関の間でキャンパス無線LANの相互利用を実現する国際的な無線LANローミング基盤です。加入している教育機関内であれば、世界中どこにいても自分の所属する機関でのID、パスワードを利用してアクセスできるというもので、大変便利です。GakuNinに加盟している大学のメンバーは登録すれば使用が可能です。



赤いリボンが掲げられた家

心理学科は、解剖学教室のある大学の中心部にはなく、旧市街地の北部の塀の外側にあります。管理が厳重で、カードをかざさないとドアが開かない箇所がいくつもあって、大学の入り口から実験を行っている部屋まで、最低3回はカードをかざしてドアを開ける必要があります。ただし、授業のある月曜日から金曜日は、1カ所を除いて開いています。土日はすべてがロックされているので、カード無しには大学構内にも入ることは出来ません。土曜日に、誰もいない研究室を抜け出してお昼のサンドイッチを買いに出かけると、一軒のドアにピンクのリボン、そして窓からはピンクのリボンをくわえているコウノトリがつり下げられていました。これは、赤ん坊が生まれたというサインだそうです。赤いリボンは女の子で、青が男の子だそうです。これはほほえましい習慣ですが、パドバ大学には奇習と言えらる伝統があります。日本と違って、卒業は個々の学生が必要単位を取得した時点で決まる仕組みになっているため、ほぼ毎日のように誰かの卒業イベントが開催されています。卒業証書を旧市街の中心部にある大学本部でもらってから、家族と友人達で街に繰り出します。そこでは、まだ卒業が決まっていない学生によ

る卒業した学生への「制裁」が行われ、写真を撮るのものはばかれるような格好をさせられ、町中を歩き回されます。私がみたものでは、半裸を通り越した格好で歩いている男子学生や、日本の幼稚園や小学校の学芸会でよく使われる紙製の帽子をかぶせられた女子学生など様々です。大声で歌いながら歩き回っています。

8月下旬、イタリア中央部のアックーモリという村付近でマグニチュード6.2の地震が起きました。この付近は最近も頻繁に地震が起きていたようで、NHKのイタリア紀行番組でも取り上げられていました。未明だったせいかどうか分かりませんが、眠っていてパドバでは全く気がつきませんでした。TVで長時間報道されていました。この地域は風光明媚なため観光地になっていますが、建物が古い景観をとどめた石造りなので、大変地震には弱いそうです。早い復興が望まれます。

パドバは、観光地としても知られていて、特に教会内部のフレスコ画が有名です。その中でも、スクロヴェーニ礼拝堂のフレスコ画は見事です。これ以外にも、サントーニオ聖堂、ドーム広場、ラジョーネ広場、ガリレオを始め、パドバゆかりの人物像が建ち並ぶプラート・デッラ・ヴァッレ、大学付属の世界遺産に登録されている植物園オルト・ボターニコ等、見所が満載です。旧市街地は比較的狭いので、十分歩いて回れます。オルト・ボターニコは、現存する

当時のままの場所にある大学付属の植物園としては世界最古で、ゲートが植物の形態に関する発想を得たといわれるシュロの木も温室内に保存されていて見ることが出来ます。

この記事は9月末に書いていますが、ベネチアへは、帰国間際にも行ければと、グッピーの遊泳行動を映し出すモニター画面を見ながら念じているところです。



スクロヴェーニ礼拝堂のフレスコ画

2017 年度「日本在住学生会員の ABAI/SQAB 参加に 対する助成事業」

渉外委員会

日本行動分析学会では、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、毎年、ABAI や SQAB などの国際学会参加を助成する事業を行っています。2017 年度もこの事業を継続して実施します。

来年度の助成対象は 2017 年 5 月 25 日から 29 日に米国デンバー（コロラド州）で開催される ABAI 第 43 回年次大会または SQAB です。申請するためには、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムやパネルディスカッションのスピーカーのいずれかであること、また口頭発表、ポスター発表では第一発表者であることが条件です。その他の条件については学会 HP の募集要項をご確認下さい。

応募〆切は 2017 年 3 月 31 日（消印有効）です。学会 HP からダウンロードできる申請書に必要事項を記入し、その他の資料とあわせて、日本行動分析学会事務局まで郵送して下さい。

なお、ABAI でのポスター発表については、SABA も“Senior Student Presenter Grants”という助成事業を行っています。詳しくは、下記、SABA の HP をご覧下さい。

<http://saba.abainternational.org/grants/senior-student-presenter-grant.aspx>

SABA の助成に申請する場合、発表申込みの〆切は口頭発表やシンポジウムなどと同様に 10 月 26 日に締切が設定されています。SABA の助成に申請しない場合、ポスター発表の申込み締切は 1 月 5 日ですので、ABAI の参加申込みは参加費の早期割引のために早めに済ませ、発表申込みのための抄録作成にはその後で時間をかけることも可能です。

学生会員の皆さまの ABAI/SQAB への参加をお待ちしております。

<応募先>

〒540-0021 大阪市中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

学会 HP : <http://www.j-aba.jp/>

J-ABAニュース83号の訂正とお詫び

J-ABAニュース83号（2016年7月28日発行）
10ページの「医療行動分析学研究：参加記」の
執筆者の表記に誤りがありました。「伊村井佳
比子」ではなく、正しくは「村井佳比子」先生

となります。

著者の先生、読者の皆様、関係各位にご迷惑
をおかけしましたことを深くお詫び申し上げま
す。

編集後記

夏の暑さが和らいだと思いきや、あっという
間に秋めいて涼しくなってきました。皆様はい
かがお過ごしでしょうか。今号も無事に皆様の
お手元にお送りすることができ、安心しており
ます。ご執筆いただきました先生方には改めて
御礼申し上げます。

本ニューズレターは皆様からのご寄稿が頼り

です。引き続き、各種連載記事や、海外学会の
参加記など、皆様からのご寄稿をお待ちしてい
ます。また、「こんな連載をやってほしい！」
といった企画の持ち込みも大歓迎です。

それでは、これから本格的に寒い季節がやっ
てきますが、お体にお気をつけてお過ごしくだ
さい。（MK）

J-ABA ニュース編集部よりお願い

● ニュースレターに掲載する様々な記事
を、会員の皆様から募集しています。書評、
研究室紹介、施設・組織紹介、用語につい
ての意見、求人情報、イベントや企画の案
内、ギャクやジョーク、その他まじめな討
論など、行動分析学研究にはもったいなく
て載せられない記事を期待します。原稿は
テキストファイル形式で電子メールの添
付ファイルにて、下記のニューズレター編
集部宛にお送りください。掲載の可否につ
いては、編集部において決定します。

- ニュースレターに掲載された記事の著
作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本
行動分析学会ウェブサイトで開催します。
- 記事を投稿される場合は、公開を前提に、
個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒369-0003 埼玉県所沢市中富南 4-25
日本大学大学院総合社会情報研究科
日本行動分析学会ニューズレター編集部
眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp